

熊に助けられた木樵り

語り手…渡部 松市さん(菱浦、明治 28 年生まれ)



イラスト／福本隆男(崎出身、三郷市在住)

隠岐島前高校郷土部収録
海士町の民話から (39)

■再話・解説

酒井董美(ただよし)

(山陰民俗学会会長、

元隠岐島前高校郷土部顧問)

昔、人が木樵りに行きておったに、があいな大雪になって道が分からんやあなつて、そんなときに熊が出てきて、その熊がな^{あり}あ蟻をこげして(こういうふう)に拾ってよう手にすり込みすり込みして、そっからまた蟻をけ、何すっかと思や、こがこがこがけ、何ててそがしておる熊がおっただわ。

大雪に困^{なけ}とったに、熊が踏んで道つけて、わが穴ん中連れて行きたちゆう。そっから、行きたら、わが側に寄せて熊は力があっけん、殺すだども、熊ちゆうもんは、「そがんことすつもんだねえ」とか何とか言って話す。

いい加減なつと手をこ握る。口のとけへ。なめてごせちゆうことだらわの、その手を。蟻をすり込んだやつ、そがして一週間も熊の穴倉におったに、ま、雪がちいと解けて、ほっから、

一いなあーと思つて出かけたら、われ後からついて来て、そっから木樵りの男を送つたという話で、そらま、簡単なそっほどの話だ。

■収録：昭和50年11月28日

■聞き手：福原隆正・池田百合香・小新恵子

【解説】 関 敬吾『日本昔話大成』には出ていない話型である。まさに熊に助けられた木樵りの話である。鶴の恩返しとか蛙の恩返しのように、人が動物を助けて恩返しをされる話はよくあるが、今回の話はまったく逆で熊に人が助けられた話である。全国的に見て珍しいスタイルを持つこのような話が、どうしてここ離島である海士町に残されていたのだろうか。その理由はよくは分からないが、海士人のやさしさがこのような話を生み出したと考えたらいかがだろうか。

聞き手の3人のうち男性の福原隆正とあるのは、当時、私と共に郷土部を指導してくれていた福原教諭であり、残りの2人は郷土部員の生徒である。